

ト型の果実が特徴のジュノハート。ブランド化に向けて、挑戦はさらに続きます。

「はばたく商店街30選」に 選ばれた剣吉商店街

青い森鉄道「けんよし剣吉駅」を出てすぐの通りにある剣吉商店街。明治30年（1897）に開設された剣吉駅が、人や物資の行き交う交通拠点として活気づくのに伴い、剣吉商店街は名川地区の経済の中心地として発展してきました。創業80年、デマチ呉服店5代目の出町州央さんは「商店街の売り出しの日、買物客でごった返したそうです」と、親世代から聞いたかつての賑わいぶりを説明します。

少子高齢化や人口減少、大型小売店の進出などの問題に直面する



剣吉商店会会長の出町州央さん（デマチ呉服店で）



NPO法人「三本の木」の農援隊と林悦子理事長（前列右から3番目）、関則雄管理者（3列目右側）

中、剣吉商店会では地域の団体と連携しながら、商店街活性化の取り組みを行ってきました。剣吉地区の4つの町内会と「緒に開催する夏まつり、名久井農業高校との緑化活動」、「剣吉ストリート活性化委員会」（商店会役員と町内会の会長が平成22年4月に設立）とのウォーキングイベント開催やマップ作成など、さまざまな団体とともに展開する活動は高く評価され、平成28年（2016）には経済産業省の「はばたく商店街30選」に選ばれました。剣吉商店会会長を務める出町さんは、「住民それぞれが自分の役割を持ち、みんなで「緒

に地域をつくるのが大事。さまざまな世代が支え合いながら、安心して元気に暮らせるまちづくりを目指します」と話します。

NPO法人「三本の木」の 農福連携と地域づくり

農業分野と福祉分野が連携し、双方の課題を解決する「農福連携」の取り組みが注目されています。平成24年（2012）に設立されたNPO法人「三本の木」は、農業を軸とした事業運営を行い、障がいのある人の自

シビックプライド——『花は山 人は里』を訪ねて ①
名川地区／果樹のまちを
不動のものに



南部地方えんぶり（2月上旬）で、剣吉商店街を練り歩くえんぶり衆



南部七唄七踊り全国大会（9月下旬）



南部芸能伝承館で三味線を弾く久保一繁さん
（達者達人／南部町郷土芸能保存会会長）

名川地区略図



名川発祥の「南部手踊り」や 伝統芸能の数々

立や就労を支援しています。近隣農家70人を会員とした直売所「おやさいの集会所」の開設、人手不足の農家の農作業を手伝う「農援隊」、後継者のいない農地を借りて果樹や野菜を栽培したり、ドライフルーツを使った焼菓子やジャムなどの加工を行ったりしています。また、名久井農業高校の生徒が自分たちの栽培した野菜を直売所で販売するイベントを週1回行い、地域の教育にも貢献しています。

理事長の林悦子さんは「地域を元気にする力になりたい」と思いながら、事業に取り組んできました。それが農福連携につながったと思います」と笑顔を見せます。また、果樹栽培で尽力する管理者の関則雄さんは、「農家の高齢化や遊休農地の面積拡大が進んでいます、いずれはベリーファームを事業の大きな木に成長させたい」と、熱意を込めて語ってくれました。

名川地区が発祥の地とされる「南部手踊り」は、「南部甚句」「南部あいや節」「南部よされ節」「南部馬方三下り」「南部追分」「南部荷方節」「南部都々逸」の七つの踊りがあり、「南部七踊り」とも呼ばれています。数百年以上も前から受け継がれてきた民舞踊ですが、もともとは宴席を盛り上げるための踊りで、決まった形はありませんでした。明治初期、歌舞伎の動作を取り入れるなどして舞台用の踊りに仕上げたのが、名川地区剣吉生まれの栗山由太郎です。大正時代には、由太郎の弟子である館松榮源次郎らが師匠の踊りに磨きをかけ、一つひとつの踊りを完成させました。

その後、南部手踊りは全国的な広がりを見せ、「南部手踊り（七踊り）」と「南部七大民謡（七

唄）」は、町の無形文化財に指定されています。

南部町郷土芸能保存会会長の久保一繁さんは、南部三味線の奏者を代表するひとり。「若い頃はギターに夢中でしたが、母親が南部手踊りの踊り手で、芸能が身近だったことから久保正幸さんに師事し、昭和33年（1958）頃から三味線を始めました」とのこと。秋の恒例イベントとなった「南部七唄七踊り全国大会」でも伴奏を務める久保さんは、「南部手踊りはリズムが速くなるところが何カ所かあって、そこがおもしろいね」とも明かしてくれました。

南部手踊りのほか、数々の伝統芸能が根付く名川地区。名川中学校では、地域ぐるみで「えんぶり」の伝承活動に取り組んでいます。三味線演奏の講師として20年以上も生徒を指導している久保さんは、「若い世代の継承者を育てたい」と話し、地域の芸能が絶えることなく受け継がれていくことを願っています。